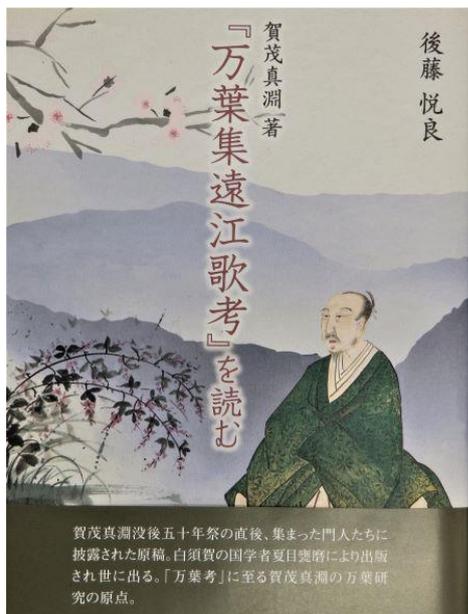


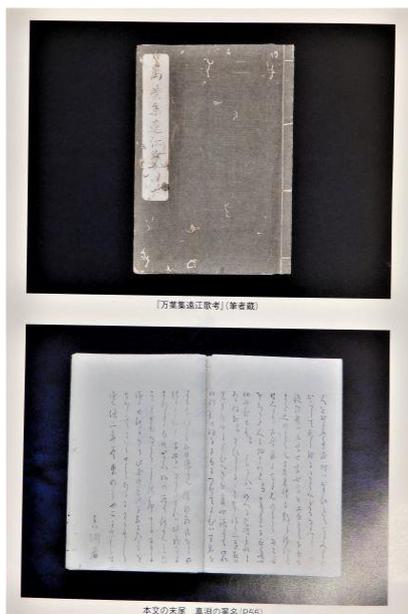
発刊 『万葉集遠江歌考』を読む 後藤悦良著

賀茂真淵記念館で長年講座講師を務める浜松史蹟調査顕彰会専門委員後藤悦良氏が、先に刊行して好評を博した、「岡部日記・訳注」および「賀茂真淵の長歌鑑賞」に続き、長年の国学研究の成果をまとめたものです。万葉を愛し、「万葉考」に至る賀茂真淵の万葉研究の原点『万葉集遠江歌考』に収められた、遠江で詠まれた歌や、遠江出身の防人の歌や東歌など19首について、口語訳だけでなく語釈、そして著者独自の視点から解説を加え、丁寧にまとめられた一冊です。真淵の和歌を理解する上で貴重な1冊といえます。

B5 版74ページの仕様で、1冊550円で記念館で販売します。谷島屋書店連尺店、谷島屋メイワン店では12月1日から販売されます。



上：表紙 右：口絵



上：万葉集遠江歌考

主な内容

- 万葉集遠江歌考について
- 遠江歌考序（内山真龍）
- 掲載されている全十九首の鑑賞
- 口語訳・語釈・参考 ※主な歌
- ・引馬野にほふ榛原入り亂れ衣にはせ旅のしるしに
- ・あらたまの伎倍の林に汝を立てて行きかつましじ寐を先立たね

賀茂真淵記念館で販売 550円
※代金振り込みによる郵送も可能です。

【語釈】
二年壬寅（大正十一年）
東鑑『鎌倉時代後編』
一、二五四年。宗尊親王（建長四年）
送還され後出家。和歌に通じ
ま三河の国に統いているので。
注1、真淵の解説にある通り、
注2、万葉集（巻四・四九五）
朝日

【語釈】
本文に登場する
語句の解釈

【参考】
一、この「引馬野に」の歌については大きく次の三つの問題点があり、定説が得られていないのが現状である。
①引馬野の所在地。

最後に参考となる資料等を掲載

『早時代の阿仏尼の「十六夜日記」を指す。文で日記体で編述。建長四年（西暦の皇子。中書王。謀反の疑いで京都にやがて参河国につぎきたれば』そのま
本に「甲辰太上天皇幸参河国」とある。
（田部忌寸様子）

【口語訳】
この歌につき、私見
まり大宝二年（のこと
ており、「太上天皇」
一卷の冬の条の記述に
きなさつたとの記述は

【口語訳】
変詳細です。しかし、解釈の中身ではなく、説明の仕方を味わいましょう。丁寧かつ詳細な説明ですが、かと言って重箱の隅をつつくような些末主義ではなく、より読み手に伝わるよう、温かく丁寧に必要なことだけを説明しています。

【本文の内容構成】

一、五七（万葉集卷一 五七番歌）
（歌の万葉仮名と、よみかた）
ヒクマノニニホフハギラ イリミダリ コロモニホハセ タビノシルシニ
引馬野爾 仁保布榛原 入亂 衣尔保波勢 多鼻能知師尔
（真淵による歌の解説本文 翻字）

真淵による万葉集の解説は、大変詳細です。しかし、解釈の中身だけではなく、丁寧かつ詳細な説明の仕方が味わえます。

真淵按に、二年壬寅は文武天皇即位二年也、太上天皇は持統天皇、此時太上天と申奉る時也、此御幸は續日本紀卷第一冬十月にみえたり、それにも参河國に御幸とありて、遠江に至り給ふこともみえねども、濱松の宿をひくまのすくといひし事、阿佛尼の記にみえ、東鑑にも建長四年宗尊親王の下り給ひし時、引馬の宿にやどり給ふことみえれば、おのづからいひ來れる地名つたがひなき物か、今も宿の北の方にて、引馬坂といふをのほれば、いと大なる野の北はやがて参河國につぎきたれば、御幸のをり、官人るべし、此集に某の國に行幸と標して、隣國の地名の寄あるぎ原はさこ

一、（五七）
引馬野爾仁保布榛原入亂衣尔保波勢多鼻能知師尔